

## 教職大学院1年生は、長期実習で何を学んだか！

教職大学院通信第23号で「修了生の『今』から教職大学院の可能性探る！」、同第26号では「『教育実践プロジェクト』の世界」というテーマで、教職大学院における学びや実践研究の実態と特色を紹介しました。では、教職大学院1年生は、9月から始まった教育実践プロジェクトⅠや長期インターンシップを通して「何を学んだか」振り返ってもらいました。

各連携協力実習校及び附属小・中学校の教職員の皆様には、大変お世話になりました。お陰様で、とても充実した実践研究ができました。(文責:石嶋和夫)

大学院生名	教育実践プロジェクトⅠや長期インターンシップを通して「何を学んだか」
石川 綾子 (現職院生)	子どもたちの日々の姿を先生方と共有する中で自分を振り返ることができました。子どもたちの学びについて一緒に考えさせていただけることに感謝し、理論と実践が融合した専門的な力を高めていきたいと思いました。
井寺 聡 (現職院生)	先生方の人間関係がとてよく、仕事がチームワークよく遂行されている様子から、同僚性の大切さを改めて実感しています。他地区の学校ということで、客観的に教育活動を見ることができ、多くの学びを得ています。
伊藤 駿 (学卒院生)	二か月半にわたる長期実習では、自分の研究についてだけでなく、授業力や学級経営、児童理解についても体験を通して学ぶことができました。来年度の実践につながる課題が見え始めた、充実した長期実習でした。
大関 健一 (現職院生)	先生方の姿から、日々、変化し続けることの大切さを学びました。教育観や教育方法、自分を見つめ、変わり続けること。今まで考えてきたことも、今考えていることも、常に子どもの視点から見つめ直していきたいです。
小川 雅弘 (現職院生)	長期実習では、初めての先生方との関わり方や担任の先生の学級経営の工夫、中学校と小学校の違いについて学びました。また、教室にいたることが多い担任の先生との情報の共有の難しさについても学びました。
小又 永理 (学卒院生)	個性や良さ一つ一つに輝きがあり、素晴らしいものであるということがたくさん学ぶことができました。そして、子どもたちと向き合うことができる喜びを大切にしたいという思いが、今まで以上に強くなりました。
柴田 哲朗 (現職院生)	私は長期実習を、所属校で行っています。今までとは違う立場で、学校を見ることができています。改めて、学校の多忙さが見えます。教職員同士の隙間、生徒と教師の隙間を埋められる教師が必要だと感じました。
高橋 真実 (学卒院生)	「子どもの思いをもとに授業をすること」その大切さと難しさ、両方を学びました。教育活動すべての場面で、常に子どもの心の声に耳を傾けながら、一人一人と丁寧に関わり続ける教師を目指します。
田村 光 (学卒院生)	先生方の熱心な姿、子どもたちの一生懸命な姿が大きな刺激となり、「もっと成長したい」という気持ちが高まった時間となりました。この心と感謝の気持ちを大事にし、今後ますます頑張っていこうと思います。
土山 桃佳 (学卒院生)	長期実習を通して、「児童の実態に合った授業づくり」と「学び続ける姿勢」の大切さを改めて学ぶことができました。今までの自分を振り返るとともに、この貴重な学びを糧に次年度へと活かしていきます。
寺崎 裕史 (現職院生)	本実践は、目の前の子どもたちにとって「よい授業」とは何かという視点から指導を省察する機会となりました。生徒と共に学ぶ喜びを再確認し、専門職として職責の大きさを実感します。
戸田 智之 (学卒院生)	生徒が一人一人違う学び方をしていることが、分かりました。ある生徒は授業を終えた後にまとめをすることで、またある生徒は友達の話聞くことで、別の生徒は授業中にクラスを笑わせることで学びを深めていました。
永嶋 政宏 (現職院生)	正に理論と実践の往還の機会となりました。成果を大きく感じるの、子どもの見方です。今この子は何に困っているのか、このように理解した背景は何か、と個に寄り添った見方から支援を考えられるようになりました。
成田 芳子 (現職院生)	在籍校で実習させていただいています。4月から久々に会った子どもたちの成長ぶりに驚き、実習がスタートしました。この成長の鍵は何か、毎回の実習の中で学ばせていただいています。
村田 有美 (現職院生)	在籍校での実習において、新たな視点で子どもとかかわることの大切さを学びました。また、自らが学ぶ過程を通して、子どもたちの学びについても、より深く考えるようになったと感じています。
湯澤 浩之 (現職院生)	学校が子どもたちにとって温かな場所であること、子どもたちにはその学びと成長を願う多くの支えがあるように、教師にも支えてくれる同僚がいることなど、学校という組織の在り方を学ばせていただきました。

## 「生活や学びをよりよくするプログラミング的思考」教育実践高度化専攻教授 久保田 善彦

窓を開けて欲しいとき、人間は「窓を開けてください」の一言で行動できます。ロボットに同じ動きをさせるには、向き、移動距離、腕の上げ下ろしなど細かい命令を順番に伝えないといけません。ロボットへの命令のように、問題や事象をいくつかの部分に分解して考えることが、プログラミングの基本です。単純に細かくすればいいのではなく、目的に応じて適切な大きさ（粒度）で分解することも大切でしょう。「分解」することは、「一度立ち止まり、改めて見直す（メタ認知）」ことや「要素の意味を捉え直し、活動を工夫（順番や省略）する」ことにも繋がります。

そう考えると、プログラミング的思考を使う場面は、日常生活に沢山あります。例えば、ご自宅で夕ご飯を支度する場合は、コンロの数、包丁の数、時間などの制約の中で、3～4品の料理を調理します。各料理の手順を分解し、その要素を見通しを持って組み合わせることで、温かい料理を家族に提供できます。組み合わせの目的は温かさだけではなく、速さや味などにこだわり、別の組み合わせを考えながら調理を進めることもできます。このように調理を考えると、主婦や主夫の皆さんは、高度なプログラミング的思考の持ち主であることがわかります。

プログラミング教育は始まったばかりです。いろいろな考えや手法が提案されていますが、身近なところから考えていきましょう。

### 《シリーズ:教職大学院授業紹介⑦ 「教育実践研究方法論」(選択科目[前期])》

長期インターンシップや教育実践プロジェクトでは、連携協力校の学校改革や授業改善に協力しながら教育研究を進めていきます。そこでは、多様な教育実践に向かい合い、自らも参加しながら、データを収集したり分析したりしていくことが求められます。「教育実践研究方法論」では、具体的なデータを基に討議することを通して、教育実践を対象とする研究方法論について理解し、自分の研究を進める方法や視点を獲得することを目指しています。この授業は、大学院生からの要望も受け、今年度からスタートしました。

授業は、4名の教員が異なる観点(質的研究の観点、談話分析の観点、量的研究の観点、社会科学の観点)から講義をし、最後に、共同でそれらの観点を振り返っていくという形をとっています。今年、以下を含む授業内容でした。

- ・質的研究の特徴と問いの作り方、フィールドでのデータの種類と収集の仕方、データ分析の方法について
- ・授業中のやりとりに対する談話分析の手法と、データへの適用について



- ・データの統計的な分析・考察、インタビューや自由記述の特徴を考察するテキストマイニングの手法について
- ・「論文」を書く上でのポイント、特に、複眼的思考法や問いの立て方について

そして、授業の最後には、幾つかの研究論文を共通して読みあい、研究方法について議論を行うを行いました。

受講した院生からは、「研究の手法や分析の仕方の基本を演習も含めて行ったため、研究とはどのようにしていくものか、何がデータとなり、どう取っていけばよいか、漠然としていたものが、少しはっきりしてきたように思います。」「自分の実践を見つめ直す上で、こうした研究の視点を通して振り返ることはとても重要であり有効であると思いました。」といった感想がありました。院生が実習や研究で活用しやすいように、今後も、授業の内容を改善していきたいと思っています。

(担当:日野圭子、久保田善彦、司城紀代美、小野瀬善行)



《編集・発行》宇都宮大学大学院 教育学研究科 教育実践高度化専攻 (教職大学院)

〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町350番地 Tel: 028-649-5242 <http://www.edu.utsunomiya-u.ac.jp/koudoka/index.html>

◇教職大学院Facebook: <https://www.facebook.com/uuptnet> ※院生が編集し、教員が管理しているFacebookです。

